

ドストエフスキー著・亀山郁夫翻訳

『賭博者』

光文社古典新訳文庫、二〇一九年

白井 史人



『カラマーゾフの兄弟』『罪と罰』『悪霊』『白痴』など、フォードル・ドストエフスキー（一八二一—一八八二）の多くの小説の翻訳を手掛けてきた訳者による新訳である。

一八六六年の秋に、口述筆記によって執筆された中編『賭博者』の舞台となるのは、ドイツの架空の町・ルーレットテンブルク。カジノに出入りする多彩な面々のギャンブルをめぐる心の動きや、恋愛、嫉妬、猜疑などが余すところなく描写されている。

一人称の主人公アレクセイ・イワノヴィチは、「將軍」の家に住み込む二十代の家庭教師で、「そもそも自分の人生なんてゼロにひとしい」（二三頁）とうそぶくロシア人青年である。このアレクセイを取り囲むのは、どこか出自が謎めいた人物たちだ。アレクセイの主人「將軍」は、フランス人のデ・グリユー侯爵に多額の借金を抱えており、マドモワゼル・ブランシュに入れ込んでいる。モスクワに住む「おばあさん」（將軍の伯母）には頭が上がらず、遺産の相続を待ち続けている。將軍の義理の娘ポリーナは、アレクセイの病的な恋心をもてあそびつつ、デ・グリユーとの関係を匂わし、同じく自らに魅かれるイギリス人実業家のミスター・アストリーとのあいだでも曖昧な態度を保っている。

度を保っている。

アレクセイはマゾヒスティックに焦がれるポリーナの命令にしたがってルーレット賭博場に入り込むようになり、「おばあさん」のルーレットテンブルク訪問とともに物語は大きく動いていく（第九章）。アレクセイとポリーナ、マドモワゼル・ブランシュらとの関係が変化し、彼がギャンブルの興奮に飲み込まれていくクライマックスは、ドストエフスキーファンや研究者ならずとも一気に引き込む熱気に満ちている。

ロシア語原文を解さない評者に、本書の訳文の細部を論じる資格はない。それでもあえて蛮勇を奮い、既訳との比較などを通して見えてくる特徴をいくつか指摘しておきたい。

一つは、複数の言語が飛び交う小説の多言語空間をいかに翻訳するか、という問題である。舞台のルーレットテンブルクはドイツの遊蕩場（ヴィースバーデンやホンブルクなど）をモデルとしており、小説の後景に登場する労働者たちはドイツ語も使用している。しかし、アレクセイとその一行の共通言語は、ロシア語とフランス語である。

フランス語で進んでいるはずの会話がロシア語（日本語訳文）で記述されている部分も多いが、例えば、フランス人のデ・グリユー侯爵が、賭博にますますのめり込む「おばあさん」を止めるようアレクセイに迫る場面では、「*Mon cher monsieur, notre cher général se trompe.*（ねえ、きみ、ぼくらが愛する將軍は、まちがっている）、あんな口調ではじめるなんて（デ・グリユーの話）をロシア語で続けることにする」、でも將軍が君に言いたかったのは（…）（一八九頁、強調引用者）と、言語を入れ替えて記述するという語り手の注釈が挟まれている。

複数の言語が混交する構造は、ポリーナに唆されたアレクセイが、プロイセンから来たヴルマーヘルム男爵夫妻にドイツ語で挑発する場面で、よりラディカルに露呈する。

「Jawo-oh! (はあーい)」はくは「あ」の音を思いきり引きのばしていきなり叫んでやった。(八五頁)

本訳はこのように、原文に登場するロシア語以外の言語の表記を残し、括弧内に日本語訳を追記している。日本語の訳文の流れに挿入されるアルファベットにより、複数の言語が入り混じっていることが明示されるのである。¹アレクセイの一人称の視点からはこぼれがちのさまざまなコミュニケーションが同居してせめぎ合う、賭博場のヘテロフォニックな空間を、文字のレベルで示すものといえよう。

もう一つ、既訳で「わたし」だったアレクセイの一人称を、平仮名の「はく」としている点も見逃せない。訳者はあとがきで「主人公アレクセイの一人称が、訳語としてなかなか固まりにくかった」と告白しているが、アレクセイの冷笑的性格が強調される「わたし」に対し、本訳の「はく」は、人間関係や賭博をめぐる感情の起伏に流される個としての不安定さ——「しもべ」的、という読み込みすぎか——を前景化させる。この「はく」を翻弄し続けたボリーナが、小説の後半でホテルの一室でアレクセイに向かい合う場面でふと漏らすロシア語の親称二人称「あなた」も(二四九頁、訳文ママ)、既訳と異なるニュアンスでドキリとさせられた。

本作の背景となるドストエフスキーの自伝的体験や同時代の社会情勢は、巻末の読書ガイドに詳しい。当時の紙幣のカジノ内換算率と国際換算率まで比較する徹底ぶりだ。

あらゆる差異を等価にするグローバル資本主義の象徴にみえるカジノという空間で、決定的に交換不可能なものが混じり合いぶつかる。女と男、ロシア人とフランス人、日本語とロシア語、そして「はく」と「あなた」——。そんな翻訳不可能な境界を飛び越え続ける訳者の「賭け」のスリルを、多くの読者にあらためて味わってほしい。

1 一九七九年刊行の原卓也による既訳(新潮文庫)では、ロシア語以外の言語が使用されている部分は、「はあい」(六四頁)、「赤」(一二六頁ほか)など、カタカナのルビが振られているのみである。